

画文集 photo-essay

旅の空の下で



ディセプション・パス 米国ワシントン州ウドベイ島

中に展示写真の解説があります。



1 アメリカ・カナダの国境

今夏の旅の二日目、シアトルからカナダのヴァンクーヴァーを目指して高速道路 IS 5 号を北上した。途中左に、遠浅の入り江を見るピースアーチと呼ぶ国境に差しかかる。有料道路のゲートを思わせるチェックポイントで 30 分ほど列を作って待った。その時、左手の芝生の公園にこの名の由来となった「ピースアーチ」を見つけた。両国旗がひるがえっている。

陸路国境を越えるというのは、日本では体験できないことだ。だからちょっと緊張する。ゲートの係官から根掘り葉掘り聞かれ、「日本からシアトルに来て、カナダを往復して 1 週間後には帰国する」と答えたら、「そんなに急いで旅するのかわ」と呆れられた。我々がこま鼠のように仕事人間であることを、あらためて考えさせられた。

これでカナダ入境かと思ったら、先にある事務所によって税関での申告をと促された。何のこともない手続きだったが、時間がかかった。道はここから、カナダの国道 99 号線へと変わる。フレイザー河の平坦地を北へと疾走した。



2 ブリティッシュ・コロンビア大学

ヴァンクーヴァーの市街をまっすぐ西に向かうと、海にさしかかる半島の突端にブリティッシュ・コロンビア(BC)大学の広大なキャンパスがある。この街での宿泊は安さを理由に、大学内のヴァニール・ハウス(VANIER HOUSE)と呼ぶ寄宿舎にした。写真はその管理棟で、右奥には寄宿舎の一つが見える。

BC 大学は、カナダ西岸で最大規模のまた重要な高等教育機関と言える。「太平洋の架け橋になる」と言った新渡戸稲造がこの地で終焉したこともあり、校内にはその記念庭園も設置されている。初めて校内に入った時、日本人の留学生に案内してもらったが、京都の立命館からの交換学生だという。キャンパスには BC-RITSUMEIKAN HALL という施設があり、そこが居住棟だそうだ。

杉の巨木が至る所にあり、まるで深い森にいるかと思うことがあった。滞在中は十分に森林浴をさせてもらった。この森をかつて切り開いた時、初期の日系カナダ移民の姿もそこにあったと言う。日本には何かと縁のある BC 大学のキャンパスだった。



3 スティヴストンの港

ヴァンクーヴァーの南に隣接するリッチモンド市のさらに南端。この地域を潤すフレイザー河の河口近くに、スティヴストンの港がある。19世紀の終わり頃、この河を遡る鮭の大群を漁獲することで、産業を興そうとした人々がいた。この地へやって来た日系人も、その中にいた。

彼らは平底舟を操り、始め一本釣りで漁果を得たという。時代とともに鮭漁は大規模になり、これらは主に製缶され、広くアメリカ・カナダの市場へと送られた。写真左側の建物は、その製缶工場(キャナリー)の一部と言って良い。最盛期には10近くのキャナリーが並び建ったというが、その中の「ジョージア・キャナリー」は、北米最大の施設だったと言う。

スティヴストンには、和歌山県日高郡美浜町三尾の集落から多くの日系人が渡来し、漁業に勤しみ、初めはやがて帰国するつもりで収入を故郷へと送金したという。その後この地に定着し、今は日系カナダ人が集中する地区の一つとなっている。港は、シーフードのレストランが並び、ホエール・ウォッチングの船の出入りで賑わっている。



4 工野儀兵衛を記念する庭園

港の写真を写した位置のちょうど反対側。フレイザー河が海に注ぐ突端近くに、この庭園が開設されていた。工野儀兵衛とは、初めてスティヴストンで鮭漁を開始した日本人で、例の美浜町三尾の出身者だ。彼のカナダ行きから、日系カナダ移民の流れができたと言っても過言でない。1988年、和歌山県人会の音頭取りで、カナダ移民百周年を記念して、この地に記念庭園は開設された。

日系移民は、このスティヴストンを先達として、同じBC州内の鉱山やヴァンクーヴァー市の日本人街へと発展・拡散して言った。そのため和歌山県出身の一世も多いが、その他にも滋賀県や広島県、熊本県の出身者も目立つようになって行く。熊本県人は、有明海の牡蠣貝をこの地に持ち込み、おいしい牡蠣の養殖業を興していった。

しかし、太平洋戦争が日系人の運命を大きく狂わせた。内陸への強制移住や財産の没収に近い仕打ち、そして戦後も3年以上もたってからの帰郷と、同じ北米でもその運命は、アメリカの日系人よりも過酷だった。



5 新しい日系カナダ人

ヴァンクーヴァーの隣バーナビー市に日系人のセンター、日系プレイスがあった。その隣、日系ホームと呼ぶ高齢者介護施設で、インタビューを試みた。1階にあるレストラン「さくら」で昼食を注文していた老紳士、林光夫さんに出会った。聞くと、プレイスの理事をしているとかで、現在の日系カナダ人を語るにふさわしい人とお見受けした。キリスト教会の信者で、ホームの入所者のための礼拝を守るため、ここに来たと言う。礼拝前、そのお仲間との食事の輪に加わり、居合わせた方々にお話を伺った。

写真右端が、山形県出身の片山さん。夫と死別した後、一人娘とその夫がBC州のスクアミッシュ(squamish)市で日本料理店を経営しており、その縁でカナダに来たと言う。すでに市民権をもち永住を希望している。その斜め前の方が三重県出身の磯和さん。戦後間もなく、属していた日本の教会の関係で同じく信者だった妹が内陸のアルバータ州に移住した。後にそれを追うように、自分もカナダに移住したと言う。二人とも在住十年に満たない新しい日系人である。トロント在

住の真壁知子氏による『写真婚の妻たち (picture bride)』によれば、戦前カナダに渡った女性たちは自由を求め多少とも高学歴の女性だったと言う。この新しい日系人にもそれは当てはまりそうだった。

写真中央の中年女性は、何と礼拝を守るためやって来た牧師だと言う。伏井真紀 McIntosh さん。日本で育ちカナダ人の男性と結婚して、数年前この地へやって来たと言う。以前は、東京にあるICU(国際基督教大学)の教会で副牧師を務めていたそうだ。英語に堪能なので、秋からは日系人に英語で説教する牧師に専念すると聞いた。

そして左の二人が林夫妻。光夫さんは、戦後日本の大学を出た後、単身ニューヨークに渡り、やがて日本鋼管の現地法人に職を得た。鉄鉱石の関係でここヴァンクーヴァーとを往復する内、こちらの日系社会と縁が出来、退社後の生活をここで送ることに決めて永住権を得たそうだ。プレイスにある日系博物館の設立にも関与したそうだ。林さんの目下の関心は、高齢化する日系人の老後をどうするかで、隣接の高齢者用マンション「新桜荘」の事業の完成を待っているところだそうだ。



6 ディセプション・パス

さて、BC州からアメリカ・ワシントン州へと戻ってきた。しかしそのまま南に下りず、西方のオリンピア半島を目指す。そうするとピュージェット湾の島伝いに行くことになる。州道20号を行くと、道は原始のたたずまいを残した深い針葉樹の森中を進む。時おり木の間越しに写真にあるような紺碧の海を見下ろすことができる。そしてウィドベイ(先住民の言葉?)島への橋を見つけた。

あつという間に通り過ぎる。とても細い見落としそうな瀬戸を越えたのだ。それでディセプション・パスとこの地を呼んでいる。あたり一体は同名の州立自然公園となっていた。駐車場が橋の脇にあったので、そこで車を止め、少し歩き下った所でこの瀬戸を撮った。絶えず潮が奥の内海と手前の外海を往復していた。本当に風光明媚(めいび)な所だった。遠くに見える雪をいただいた山はアメリカ本土最北端に近いベーカーズ山。3000m級の万年雪を湛(た)えた山だ。

この後、南北に細長いウィドベイ島を南へと下った。



7 朝、霧の海に行く

米国ワシントン州は、隣接のカナダBC州と共に、沿岸に多くの島をかかえ、その対岸とを結ぶフェリーのネットワークが発達している。夏の朝は、それらの海面が決まって海霧に覆われる。旅の後半ピュージェット湾口のキーストーン(まるで北海道の野付半島突端のような荒涼とした所)から、対岸の町ポートタウンゼントにフェリーで渡った。所要45分だが、終わり近く車のデッキに戻った時、行く手には霧の海が広がっていた。WSFと書いたゲストに身を包むのは、州営フェリーのスタッフ。霧の向こうに着岸地はどこかと見つめていた。

海霧は冷たい海水の上に温かい空気が入って起きるといふ。太陽が上方に昇る昼頃には、これも決まって解消に向かう。電子航行をしていたのだろう、予定通り定刻にポートタウンゼントに到着し、こちらは車で海霧に覆われた街を迂回し、西方のオリンピア国立公園へと向かった。ポートタウンゼントの街は、映画『愛と青春の旅立ち』のロケ地で独特の風情が残る街だといふ。立ち寄りたかったが、今回は時間がなく諦めた。



8 ソルダック温泉

アメリカ本土の北西端にはオリンピック半島があって、その山と海とは国立公園となっている。北側のファン・デ・フーカ海峡に沿った町ポートエンジェルスから内陸に入ると、山中に三日月形のその名もクレセント湖が現れる。風光明媚な所だ。それを通過し左折すると、国立公園のゲートがある。何とここで入園料15ドルを払って、山奥深くへと進んだ。

ソルダック(sol duc)温泉はオリンピア山の懷にいだかれた夏だけ開放の温泉地で、写真の露天温泉の他に、子供たちが騒ぐ温水プールも用意されている。温度は38度、少しぬるめだ。ごらんの通り水着着用で、私も受付で海水パンツを借り、この湯に浸かってみた。水着では温泉気分が出ない。正直言って、許されるなら裸になりたかった。頭上には空が青々と広がり、この溪谷に迫る山々の緑が眩しかった。

まことに忙しい旅となった。わずか一時間でここを切り上げ、来た道に戻ってシアトルの手前、バインブリッジ・アイランドへと向かった。



9 坂の街シアトル

ワシントン州の中心都市シアトルは、坂の街だ。なぜこんな急坂があるかというと、多分港町として深い入り江に面しているからだと思う。そのまま坂を駆け下ると港の海におっこってしまう。そういう地形なのだ。先人たちは、水深のあるこの地に船を寄せる良港をつくった。

街を造る時に他のアメリカの都市同様、東西南北に格子状に道を切り開き、そこが急斜面だろうと何だろうと、馬車が這い上がれるならその道筋を曲げたりしなかったのだ。同様な地形のサンフランシスコは、その急坂に後にケーブルカーを通した。しかしシアトルにはそれもない。おかげでダウンタウンを北に向かうと、道は途中から急な上りになる。そこから西側の港に下りる道はへたをすとなお急な坂となる。写真は港側からその一つを見上げたものだ。

今夏、私も車を走らせて見たが、こうした坂ではオートマチックのLギアでも上るのに時間がかかり無理が行った。こんな無粋な街造りを当のアメリカの学者、Bルドルフスキーも嘆いている。何か強引な街造りだなあと、私も思ってしまう。



10 宇和島屋ビレッジの倉庫

旅の最後、シアトルの街で日系人が住んでいたインターナショナル・ディストリクトを訪ねた。イチロー選手のマリナーズがホームとするセーフコ球場のすぐ脇にあった。

ここの旧日本人街に日本の面影を求めたのだが、あまり成果はなかった。戦後の日系二世・三世は社会的には成功し裕福になり、そうした人たちが暮らす郊外に出てしまっている。その中で総合食品の『宇和島屋』だけが、ディストリクトの港側に大きな店舗を開いていた。中には、アメリカの主な大都市で見かける、『紀伊国屋書店』も入っていた。

旅の最後の晩は慎ましいが、ここでカリフォルニア・ロールの入った寿司を買い、店内のテーブルに陣取って夕食とした。これで緑茶でもあったら良かったのだが・・・。

宇和島屋の建物はモダンで味気ないが、隣にあった倉庫は日本の古い時代を思い出させるもので、懐かしさと共にこんな所という驚きを感じさせるものだった。



パディントン駅の回転寿司

寿司はヨーロッパでも人気の食べ物になりつつある。こちらは03年夏の英独への旅行の際、ロンドンの宿舎近く、ターミナルのパディントン駅構内で見つけた回転寿司屋『ヨーッ!』。残念だが、二貫で2ポンド(約400円)もするので、賞味できなかった。味の程はわからない。握っていたのも日本人の板前ではなかった。ロンドンには寿司屋が多くなったと聞いたが、まさかこんな身近なものになっているとは。驚いた。

それから2年後、欧州でも北東の小国、バルト海沿いのラトビアを訪ねた。首都リーガで寿司がポピュラーなものになっているのに、再度驚いた。その一軒で奮発し、バルト海産の鮮魚を賞味した。板前さんも日本人で、箸も用意してくれる本格派だった。ただし給仕としての和装の金髪女性には奇異な感じを受けた。味には十分満足した。味噌汁はインスタントだったかもしれないが、おいしかった。この街ではその店から歩いて数十メートル内にもっとお手ごろな値段の店もあったと記憶している。



ロンドンの安ホテル

安ホテルは余計かもしれない。白亜の外壁が輝いていて、特別な感じがしたので写した。左の写真のパティントン駅から直ぐのノーフォーク広場に面してある何軒かの一つ、「アシュレイ・ホテル」だ。ここに宿をとったのはヒースロー空港からのノンストップ急行がパティントン駅をターミナルとしていて、交通の便がすこぶる良いからだ。

建物はその1階が半階上った所にある、ロンドンの住宅街に典型的なタウンハウス(洋風長屋)だった。ホテルのフロントもそこにあり、朝の食堂はその半地下に備わっていた。安ホテルで部屋は粗末だったが、例のイングリッシュ・ブレクファーストはまずまずだった。香港系英国人の女給さんが親切だったのを覚えている。

ホテルの面するノーフォーク広場は東西に細長い長方で、喬木が多く茂り豊かな緑に覆われていた。夜間は入口の門が鍵で閉ざされる点も、ロンドンでよく見かける小公園と言える。二階建てバスに乗り都心から帰ると、その入口に停留所が備わっているのがスマートだった。



フォルクスワーゲン社のドレスデン工場

ドイツ東南部、昔のザクセン公国の都ドレスデン市は戦時中に連合軍の猛爆撃を受けた街として有名である。一夜にしてこのザクセンの古都は灰と石くずになってしまった。戦後、東独政府はこの街をそのままの形で復興するどころか、都心の復興を後回しにした。オペラ劇場が再建されたのも、80年代になってからだ。

90年のドイツ統一後、この街の再建のピッチは漸く速まったが、都心周辺には規模こそ小さいが重要な施設がいくつかできた。フォルクスワーゲン(VW)社のこのガラス張りの工場も、その一つだ。準高級車のフェイトを作る施設だが、ガラス張りの外観が暗示するように、中に入るとその製造工程はガラスを通して見ることができる。会社の説明ではその資材を郊外のデポ(供給拠点)から市電を使って運ぶことも含め環境に優しい工場を目指したとのことだ。なぜ都心近くに?この工場が多くの人目に触れてほしいからだと言う。

はたしてこの工場が旧東独地域の復興にどれほどの役割を果たせるのだろうか。それは業績低迷のVW社にかかっている。



マイセン磁器製の王宮壁面

猛爆撃を受けたドレスデンで奇跡的に破壊を免れたものの一つが、この王宮壁面のレリーフ『王者の行列』である。

夏のザクセン・フェスト(祭)のこの晩、賑わう王宮脇でフラッシュを炊いて撮ったのがこの一枚。闇の中にこの壁面が浮かび上がった。久しい年月、風雨にさらされてもこのレリーフは色褪せなかった。材質はザクセン公国が欧州で初めて発明したマイセン磁器を使っている。

有名な磁器発明の物語は、フリードリヒ・アウグスト公の時代に遡る。中国の磁器に魅せられた公は磁器製造の秘密を解きたいと思った。しかしそれは教えてもらえない。ザクセン公国マイセンの町に錬金術師のベトガーを監禁・拘束。独自に磁器を開発することを命じた。結果的にこれが成功する。マイセンの陶磁器は欧州にその名を知られることになった。

この晩、私はまだ再建途上だった聖母教会の足元、つまり地下ホールで開かれた少女たちの合唱の夕べを聞いた。アマチュアだったが、このために買ったチケット代は教会再建に使われたはずだ。



ライプツィヒ郊外のスーパー

92年夏のライプツィヒ市滞在は、何かと貴重な体験だった。当時「東ドイツ」(東独)という共産主義国家が崩壊して僅か2年、街にはいつの間にか「市場経済」の現実が押し寄せて来ていた。このスーパー、当時はちょうど道の反対側に帆布の屋根で急造した代物だった。市民は一日も早く、豊かな消費生活を欲していたのだ。何しろ共産圏時代の東独は、飲料を冷やす冷蔵庫さえ使うのを我慢していたくらいだから・・・。

それから数年後、アメリカのショッピングモールと似た装いの小奇麗な建物が新設され、スーパーがこちらにそのまま移って来た。このレジ付近の光景、写真がきれいなのではなく、内部の装いがまだ新しくぴかぴかなのだ。92年当時、支払いにクレジット・カードを出すと目を白黒させてマニュアルを見ながら手続きをしてくれる光景があちこちで見られた。今はすっかり慣れたようだ。これが13年を経た統一ドイツの現実の一つなのだ。



ライプツィヒ駅の地下商店街

これもライプツィヒで一枚。背後には、巨大な駅舎を覆うドームが控えている。その手前、コンコースと呼ぶ所を写したものだ。まだ東ドイツと呼ばれていた頃、この駅を利用して西ドイツへと向かったことがある。くすんだ駅舎だったが、欧州随一というその大きさに驚いたものだ。ドイツが統一され十年以上たった03年夏、ライプツィヒ市を再訪したが先のスーパーと言いこの「駅下商店街」と言い、すっかり垢抜けた施設が増えていた。

華やかなショーウィンドウなど、共産圏だった時には滅多にお目にかかれなかった。第一電力不足で、夜の街は暗かった。地下に明るい商店街が開いていることに時代の流れを感じた。

東独時代の最後、労働力不足でヴェトナムからの労働者が多かった。彼らは生活力のある人たちで、統一後もドイツに残り、今は中華料理の食材屋を開いたりしている。この地下商店街にも店を出していた。



雄牛のステーキ、クリームソース添え

ドイツ料理は一般においしいとは言われない。確かにレストランで鳥料理を注文し、一羽の焼いた鳥が丸ごと出てきて、その量に辟易したあげく、淡白な薄い塩味にがっかりした経験もある。しかし、有名なジャガイモ料理は茹でても、焼いても、フライにしてもおいしかった。また、焼いたソーセージ(ヴルスト)も大抵は肉汁がたっぷり、塩味ベースの点も日本人の口に合う美味なものだと思う。

03年夏にベルリンに宿泊した時、列車で南西部のヴァンゼー駅を往復した。その先にあるナチス時代の建物を訪ねたのだ。帰路、その名が「駅」を意味するバーンホフ・レストランに立ち寄り昼食とした。写真の雄牛の多分ヒレ肉だと思うが、そのステーキとクリームソース、茹でたジャガイモに温野菜の取り合わせは、どれをとっても美味で、さわやかに晴れ上がった青空の下、野外のテラスで食べたことも手伝って良い思い出になった。オーバーと呼ぶ給仕さんの丁寧さにも感心した。「駅前食堂」という名とその雰囲気とは相容れないものだった。



冷やした鱈に、じゃがいも他

北ドイツの街リューベックは、私が最も好きな街の一つだ。この辺りシュレスヴィヒ地方の名物は、淡水魚の鱈料理だ。リューベックから北上すると間もなくバルト海沿いの浜辺に出る。そんな田舎の食堂で初めて「冷やした鱈のムニエル」を食べたのは、もう十数年も前のことだ。せっかくの焼き魚なのに、冷やすところに疑問をもったが、食べてみるとこれが行ける。以来、この土地に来たら食事の際に気に留めておこうと思った。

03年の旅ではその最後の晩、リューベックに宿をとった。宿で紹介された表通りにある郷土料理のレストランで、メニューから鱈を選び、出てきたのがこのプレートだ。この時、鱈は焼いておらず酢に浸かっている訳でもなく、まるでシーフードサラダを食べているようだった。それでもヘルシーで焼きじゃが付きだったので、お腹は満たされた。

食後のデザートは近くの聖マリア教会で開かれたオルガン・コンサートだった。もっとも旅の疲れが出、バッハのオルガン曲を聴きながら船を漕いでしまったが。



ヘンデルの生家

2003年夏のドイツ旅行では、ヘンデルの生まれた街、ザーレ川沿いのハレにも立ち寄った。事前の情報が乏しいため適当な宿が見つからず、そうこうしているうちに私の運転していたレンタカーは旧市街の中心で歩行者専用の広場に入ってしまった。広場の脇なら良いだろうと停め、宿探しをしたのがまずかった。宿を決めて戻って来たら、早速駐車違反の紙が係官によって張られたところだった。泣き言を言っても始まらない。ここは一刻も早く車を宿指定の駐車場に入れようと言うことで、近くの公共駐車場「ヘンデル・ハウス」に乗り入れた。文字通りヘンデルの生家に寄り添う駐車場だった。

実は海外での駐車違反はこれが初めてではなかった。しかし、イギリスの地方都市ランカスターで経験した時とは勝手が違った。警察への届出義務がないことは同様だったが、郵便局にお金を納めれば済んだ。今度はその郵便局で断られ「納税事務所に行け」と言われた。この歴史ある街で観光どころではなくなってしまった。結局そうした役所を捜し当てて分かったことは、後ほど自宅に請求書が届



フエのホテルの中庭にて

くということだった。不安だったが、レンタカーの場合には借りた費用とともにレンタカー会社が決済するのだろうと了解して、ようやく心が落ち着いた。残り少ない時間を割いて、歩いて行けるザレ川沿いの城に美術品を見に行き、晩飯は例の広場に出て開いていたイタリア料理店でスパゲティーをほおぼった。

翌朝、昨日の失敗にどうも心は沈んでいた。朝食後、この街を訪ねる第一目的だったヘンデルの生家を訪ねた。かなり大きな館で、その一部は例のコンクリート造の公共駐車場へと利用されていた。写真は裏通りに面するヘンデルの生家の正面である。賑やかな広場からも近く、人通りがないのは偶然と言えそうだ。生家はヘンデルの足跡を尋ねる博物館で、分かりやすい展示に好感が持てた。中でもスピーカーから流れるロンドンでの創作歌劇『リナルド』のARIAは、心に滲みるほど美しく、落ち込んだ心身を癒してくれた。この時ほど、音楽の持つ力の素晴らしさ有り難さを感じたことはない。

それから間もなく、裏の駐車場で何ユーロかの料金を払い、「ヘンデル・ハウス」を出た。この日は、世界遺産の街、クヴェトリンブルクへと向かった。

2003年の春、初めてヴェトナムを旅した。中部の都市フエは、19世紀初めのグエン王朝成立以来、この地域の中心として繁栄して来た。香(ホン)江が街を西から東に貫流し、その北側に王宮が、南側に商業と行政の中心が置かれている。香江のすぐ南に沿い、ホテル「サイゴン・モリン」が豪壮な館を構えている。フレンチ・コロニアル様式の白壁に覆われたロの字型の建物で、奥には芝生の庭や池が配された気持ちのよい中庭があった。

あいにくこの時はホテルに泊まれなかったが、喫茶や食事そして庭でのビュッフェ形式のディナーの際に利用させてもらった。写真はそのディナーの時の一枚。余興にヴェトナム風の獅子に身を包んだ役者がフランスやアメリカから来た観光客の中を舞い踊っているところだ。奥に吊るされているのはヴェトナム風ランタン。これがとても優雅な形と趣で大変気に入った。お土産に買って来なかったのが残念！ 灯りの前にはステージがあり、グエン朝の宮廷音楽が胡弓などの楽器も交えて演奏されていた。粋な晩だった。



ハノイの旧国営デパート

ヴェトナムでの旅の最期、首都ハノイの繁華街を歩いた。ハノイは池や湖の多い町で、都心にもホアン・キエム湖という柳の木が垂れる憩いの地がある。写真のデパートは、その近くに建っていた。

ご覧のとおり吹き抜けの豪華な作りで、店内のインテリアもなかなか洒落ている。春と言っても外は東京の真夏並みの暑さが続いていた。その分、この店内は冷房の冷気が満ち、快適なのだ。

社会主義国ヴェトナムは、80年代後半よりドイモイという近代化政策を掲げた。それは順調に推移し、今や高い経済成長と豊かな消費生活が広がりつつある。地方はまだまだ貧しいが、都会の変化は目覚ましい。洗練されたデパートの出現も、その表れと言える。

この国とかつて戦争していたアメリカも、交流と取引を拡大している。ハノイ市内にも、オペラ座の近くに「ヒルトンホテル・ハノイ・オペラ」を進出させた。ヴェトナム戦争は、遠い昔のことになりつつあるようだ。



203 高地から見た旅順港

2004年夏、中国東北部へ旅行した。旅順へは、大連からホテル従業員李さんの話に乗って、彼女の男友達の運転する車で出かけた。李さんはガイドの知識もなく、危ない旅順行きだった。旅順港には軍経営の軍港公園があり、何元か払って入場した。眼前に日露戦争時、ロシア艦隊を半ば封鎖した港口が見えた。しかしここは外国人立入禁止で、すぐに退散した。

次には禁止区域外の203高地を目指した。港の数キロ北西に位置し、海拔203mの高地なのでこの名となった。中腹の駐車場からは徒歩で上る。使われた大砲の金属を溶かして造られた記念塔が、今も山頂近くに建っていた。そのすぐ脇から、先程の旅順港を望見したのがこの写真。

日露戦争の1904年、乃木希典率いる第三軍がこの高地占拠のため死闘を繰り返した。ロシア側は、想像を絶する堅固な要塞を構築していた。日本側はこの高地奪取により、正確に旅順港のロシア艦の位置を割り出そうとした。終にその奪取に成功した12月初め、当時草原だったこの丘には、うっすらと雪が積もっていた。



水師營の会見所

旅順への遠出で最後に立ち寄ったのが、ここ水師營。珍しく、写真の鳥居状の門の左に私自身が写っている。恐縮です！。

先の 203 高地攻略により 1904 年の 12 月、旅順港に停泊していたロシア太平洋艦隊は壊滅的な打撃を受け、旅順を死守すべく構えていたロシア軍も降伏を余儀なくされた。要塞守備のロシア軍司令官ステッセルが、第三軍の乃木に降伏を打診したのが年明けの 1 月 1 日。5 日にはここ水師營での会談となった。水師營は旅順のやや北東よりの集落で、その中心から道を西へ向けて入った所にある。

当時会談に適当な建物が物色されていたが、激戦でまともな建物が残っていなかった。その時、今となっては粗末な平屋の建物が見つかった。何しろ、屋根には野草が茂り、床は土間のままで、主に漆喰で装われた代物なのだ。この時、ステッセルは乃木に愛馬を贈ったと歴史の本には書いてある。

旅順陥落の衝撃は大きく、わずか半月後、ロシアの首都サンクト=ペテルブルクで反戦の「血の日曜日事件」となる。